



# 雨風食堂

---

芳田尚哉

---

雲ひとつない空が広がっている――にも関わらず、人々は頭の上に手を載せ、慌てて走っていた。

突然、なんの前触れもなく雨が降ってきた。今日の降水確率はゼロパーセント。晴れの予報だった。事実、改めて空を見ても雲は見あたらない。

ある者は手近な店に飛び込み、ある者は地下街に駆け込み、ある者は駅に駆け込み、ある者はアーケードのある商店街に向かって駆けている。目的の場所に急ぐ者もいる。

そんな中、彼はただひたすら走っていた。

適当な場所で雨宿りをすればいいのだが、用事のない場所に行きたくない。ただそれだけだ。彼は大通りから路地に入る。ビルの間に入ったところで、雨の勢いが変わるわけでもないが、なんとなくビルの壁が文字通り壁になってくれている気がする。

入ったことのない路地の先には、見知らぬ世界が広がっていた。別段違う場所ではないが、普段と少しずれただけで、別世界に踏み込んだ気分だった。

見たことのない建物。見たことのない店。それはとても新鮮で、心躍るものがあった。――雨さえ降っていなければ。

ほんの少し移動しただけで、雨の影響がなくなるはずもない。

彼は見知らぬ世界を走り続ける。

大通りからはずれたせいか、人通りが少ない。ぼつりぼつり見かける人は、例外なく同じように走っている。

雨が止む気配はなく、ひたすら走っていると、ふと鮮やかな赤い暖簾が目に飛び込んできた。どうやら食堂らしく、`雨風食堂、という文字が読めた。

面白い名前だな……と思い立ち止まる。と、不思議と空腹感が襲ってきた。

そうなれば迷う必要はない。

彼は暖簾をくぐって店内に入った。

「いらっしゃいませ」

店内に入ると、若い女性の声が出た。十ほどあるテーブルには客の姿はなく、店員らしい姿もない。おそらく奥の厨房にいるのだろう。

実際そうだったらしく、奥の方から先ほどの声の主が出てきた。彼は女性の年齢を判断する事が苦手だったが、どう見ても年下だと思った。そう思えるほどに幼く見えた。

「おひとりですか？」

ポニーテールを揺らしながらにっこりと訊いてくる。

「ええ」

訊かれて答えると、どうぞと席を案内される。他に客はいないのでどこでも自由な状況ではあったが、案内されるまま、入り口から見て左奥の席に座る。

言われるまま座ってメニューを確認しようとするが、テーブルにそれらしいものはない。店内

を見回しても、綺麗ながらも年季が入った珪藻土の壁が雰囲気を出しているだけで、それらしいものはない。

もしかして、別にメニュー表を持ってきてくれるのかと待っていると、先ほどの女性がお冷やが入ったグラスと、あたたかいおしぼりとバスタオルを持ってきた。

「びしょ濡れじゃないですか。それを使って下さい」

そういえば雨で濡れていたのだと思い出して、バスタオルを受け取り髪を拭く。

「雨が降っているんですか？」

「ええ。晴れているのに」

髪を拭きながら答える。

「天泣ですね」

「てんきゅう？」

聞き慣れない言葉に髪を拭く手が止まる。

「天が泣くと書くんです。天気雨とか日和雨や狐雨とも言いますね」

「ああ、狐の嫁入りとか」

「そう言う事もありますね。でも、私は天泣という名前が一番綺麗だと思うんです」

「確かに。そういう言い方は初めて聞きました」

「あまり有名じゃないかもしれませんね」

「タオル、ありがとうございました」

ひとしきり髪を拭いたタオルを返す。

「いえいえ。ところでアレルギーや、苦手なものはありますか？」

訊かれ慣れない内容に、一瞬戸惑ったが、特にありませんと答える。

「ところで、メニューは……」

遠慮がちに訊くと、女性はにこりと笑う。

「当店には、メニューはないんです」

「ない……ですか」

考えもしなかった答えに言葉が出ない。

「はい。では、ご用意しますね」

女性は特に説明もなく厨房に向かう。

これは怪しい店に入ってしまったか……と、このまま店を出ようかと思ったが、すぐに厨房から流れてきた香りに、せっかくだし食べていこうと決めた。

メニューがないにしろ、なにかそれらしいものはないかと改めて見ても、やはりそれらしいものはない。そもそもポスターの類すらない。

それにしても、食堂なのにメニューがないとはどういう事なのだろうか。ラーメン屋のような一見すれば専門店でも、餃子や炒飯といったものがある。蕎麦屋にも丼ものやカレーライスだってある。

そういう店とは異なり、ここは一見すれば普通の大衆食堂だ。数え切れないほどメニューがある店は知っているが、ないという食堂は初めてだ。

先客でもいれば、どんな内容なのか知れるのだが、あいにくとそれはできない。

ただ食事をするだけで、これほど緊張するのは初めてだ。

緊張して待っていると、小鉢が運ばれてきた。お通しか先付けといったところか。

「順にお持ちしますね」

それだけ言うと戻っていく。他に誰の姿も見えていないが彼女だけだろうか。

そんな事を考えながら小鉢を見る。どうやら春雨の酢の物のようだ。

「いただきます」

手を合わせてから割り箸を割り、酢の物を口に運ぶ。

春雨のつるんとした食感と甘酸っぱい酢の酸味が口に広がる。優しい酸っぱさで、酢の物が苦手な人でも食べられそうだ。

またすぐ食べたくなり口に運ぶ。次はキュウリとキクラゲのコリコリとした食感が、さっきとはまた違い楽しい。あっという間に小鉢が空になってしまう。これほどたくさん食べたいと思った酢の物は初めてだ。お代わりができるならしたいところだが、この先もいくつか料理が出てくる事を考えると我慢としたところだろう。その分、期待が大きくなる。

不安しかなかった数分前とは変わり、この店は当たりじゃないかと思えてくる。

その期待に応えるように、次の料理が運ばれてきた。

「お待たせしました」

そう言って置かれた皿には、揚げ春巻きが三本。少し小さめに作ってあるようだ。

女性は空になった小鉢を持って戻っていく。

どうにも食欲をかき立てる香りと、さらに酢の物で食欲をかき立てられているので、勢いよくかぶりついてしまう。

熱っ！

当然といえばそうなのだが、熱々の中身が飛び出してくる。勢いよくグラスの水を飲んでなんとか落ち着く。

「なんだ、これ」

落ち着いて味がわかってくると、普段食べているものとは全然味が違う事に気付く。中身はなんだ？ と中身を覗く。

「なるほど」

思わず唸ってしまう。

中からはみ出ているのは春雨なのだが、普通の中華風の味付けではなかった。広い意味で中華風といえば間違いでもないのだが、ピリ辛に味付けされているそれは、どうやら麻婆春雨のようだ。それだけでも成立する料理なのに、それをさらに春巻きとして仕上げている。春雨のピリ辛と春巻きのパリパリとした食感が新鮮だ。

あまり辛すぎないその味付けは、食べているにも関わらず、空腹感が増していく。もっと食べたいが、食べてなくなってしまうのが残念に思える。

熱さと喪失感と戦いながらも、結局あっという間に完食してしまう。

その時間を見越してなのか、見事な計算と賞賛したくなるタイミングで次の料理が運ばれて

きた。

「お待たせしました。白身魚のみぞれあんかけです」

湯気が立った皿には、片栗粉をまぶして揚げた魚の切り身がふたつ。とろりとした黄金色の餡がかかっている。付け合わせとして、レンコンや人参といった根菜の素揚げが添えられている。

あたたかいうちに食べないと、と白身魚に箸を入れる。

ほくほくした身がさくっと割れると、とろりと切り口に餡が流れていく。

「いただきます」

改めて言って、大根おろしと一緒に絡めて口に運ぶ。

思った以上に熱く、はふはふとしながら味わう。

餡のベースの出汁の優しい味が広がっていく。ほのかな油は大根おろしと合わさって、それぞれの旨みを引き立てている。そして魚の甘みが口の中を泳いでいく。

一気に一切れ食べてしまう。

ここで気分転換と、付け合わせの素揚げに餡をまぶして口に運ぶ。

揚げてあるのでほくほくだけでなく、ぱりとした食感が加わっている。餡は魚だけでなく野菜にも合う。

魚と根菜を交互に口に運んでいると、ご飯が運ばれてきた。

「本日の料理は、これで最後となります」

そう言いながら置かれたお茶碗には、炊き込みご飯が盛られている。

「これは？」

見ればわかるようなものだが、思わずそこから立ち上る香りが食欲をそそり訊いてしまう。

「こちらは、蛤の時雨煮の炊き込みご飯です」

説明され改めて見ると、確かに蛤らしい貝の姿がある。時雨煮と聞いて、食欲をそそるこの香りは、おそらく生姜によるものだと思えた。

「ごゆっくりどうぞ」

小さく礼を返し、ご飯を口に運ぶ。もちろん、蛤は必須だ。蛤のうま味はもちろん、時雨煮の生姜風味が口に広がっていく。

食べる前はそれぞれ別に食べた方がいいとも思えたが、実際に食べると最強の組み合わせじゃないかとさえ思えてくる。

残っているみぞれあんかけにも箸をのばす。蛤の旨みが加わり、また違った風味が広がっていく。

試しにご飯の上に餡を少し乗せて食べてみると、出汁と大根おろしの加わった以外にも、なにかの相乗効果があったのか、単純な足し算ではなくかけ算になった味が広がる。

普段の炊き込みご飯なら漬け物が欲しくなるが、これはそんなものが邪魔になる気すらする。

行儀悪かろうがなんだろうが、たまらずかき込んで食べきってしまった。

「ごちそうさまでした」

おいしかった……と満足していると、熱い緑茶と小さなお皿が運ばれてきた。そこには黄金色の小さなものがのっている。どうやらあられのようなのだ。

「お食事はいかがでしたか？」

「どれもとてもおいしかったです。こんな料理、今までどこでも食べた事がないです。食べれば食べるほど、もっと食べたくなるなんて初めてです」

あまりのおいしさに、思わず興奮してしまう。

「そうですか。ありがとうございます」

女性は笑みを浮かべながら言う。

「本当においしかったです」

「今日はなんだい？」

唐突に入り口の方から渋い男の声がして振り向く。

「いらっしゃいませ。食べてみてのお楽しみですよ」

女性が笑顔で言っている間にも、男は勝手知ったる様子で席に座っている。

「わかってるよ。楽しみだな」

「すぐに用意しますね。それでは、ごゆっくり」

そう言い残して厨房に向かう。

もう少し話していたかったと思いながら、あられを口に入れる。

食事を終えていたので油断していたが、程良い塩味と香ばしい香りが口に広がり驚いてしまう

。

緑茶を口に含むと、少し甘めであられの塩分が欲しくなる。すぐにあられに手が伸びる。

「今日の酢の物もうまいな」

先ほどの男が、春雨の酢の物に感激しているのを見ながら、これからもっと感激する姿を想像して、自然と笑みが浮かぶ。

ポリポリとあられを食べて、お茶を飲んで……と、くつろいでいると、

「おおっ、今日は春巻きか。……こうきたか。さすがだな」

そんな声が聞こえてきた。

ああ、あの春巻きはおいしかったな……と、満腹になったはずなのに、また食べたくなってくる。

このままでは、ここから出る事ができなくなってしまいそうだ。

あられを頬張り、お茶を飲み干す。もったいない事をしたと思いつつも、また来ればいいだけだ。

お会計をして外に出ると、さすがに雨は止んでいた。

心も晴れ晴れしてふらりと歩き出す。

ひらひらと蝶が一頭、目の前を横切った。

F i n o .

## 雨風食堂～おしながき～

---

- 春雨の酢の物
- 揚げ麻婆春雨春巻き
- 白身魚の囊餡かけ
- 蛤の時雨煮ご飯
- 緑茶とあられ

## 雨風食堂

<http://p.booklog.jp/book/110250>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110250>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト